SHIMADAI Edge

尖った研究だから生まれる最先端

FILE 1

人間科学部 心理学コース 教授 岩宮恵子

「思春期心性」を補助線として、こころに深く向き合う

岩宮教授（前列右から2番目）と、こころとそだちの相談センタースタッフ

島根大学の「こころとそだちの相談センター」は、臨床心理士・公認心理師の資格を持った教員・指導員を中心に「こころ」と「そだち」をサポートする、地域に開かれた「こころのケア」の拠点。松江にあるセンターと出雲分室合わせて年間7000ケース以上もの相談があり、国立、私立を含め大学が設置した中で全国一の相談件数を誇っています。

同センターでセンター長を務めるのが、長年、臨床心理の現場で研究を続けている岩宮恵子教授。自身も多くの相談者に対して心理療法で関わり、その臨床活動の中で感じたことをもとに研究を続けています。岩宮教授の研究テーマは、「思春期の心の特性に関する研究」。思春期の心の特性とは、第二次性徴の時期だけを指すものではなく、思春期に起こりうる心の性質という意味。「何歳になっても思春期の不安定な心持ちから自由になれず、大人になれないことが、現代のさまざまな生き辛さにつながる部分もあるのでは」という気づきから、思春期心性を持つ人が全年代に広がっているという仮説に基づいた研究をされています。

一般的には、思春期は子どもから大人への通過点であり、大人に対しての反抗を経て、責任を負える大人になっていくと考えられてきました。「ところが今は思春期にぶつかるべき『大人』が家庭に存在せず、親が一番話の合う親友という場合になり、これまでの5年と次の5年では様相が全く異なってしまうのが現代社会。年齢を問わず誰もが、常に変化の中に身を置かなければならなくなりました。「自分の体も心のありようも大きく変わる思春期は、『思春期危機』と言われるような脆い心理状態になることがあります。そのような状態が全年代に広がっているのかもしれません」。目まぐるしい変化に常に対応するということ自体、人間にとって元々難しいこと。それでも現実として社会が激しく変わっていく中で、ついていけない人たちが出てくるのは当然だと岩宮教授は話します。「その状況を、もしかしたら思春期という言葉で捉えることができるのではと思うようになったんです。世の中全体が変化のさなかの思春期になってきているという仮説を立てて、それを補助線として一本引くと、何かが見えてくるのではないかと」。

「推し活」に夢中になれる、そんな若々しい大人が増えている一方で、責任がとれる大人がいなくなってきている背景には、そもそもの社会構造自体が変化しているからでは…と社会学の教授と話すことも多いそう。そんな世の中では、どんな方が、どんな困り方をしているのか、それを丁寧に聴いて深く掘っていくのが、臨床心理学としての関わり方であり、岩宮教授が一番大切にしている研究テーマ。思春期心性が及ぼす影響について明らかにし、現代を生きていくというのがどういうことなのかを多角的に見ていきたいと話します。

大学院生に対し実践的にカウンセリングの経験を積んでもらい指導するなど、後進を育てることにも注力。一人ひとり異なるクライエントそれぞれの課題に深く向き合い、細やかに紡ぎ出す姿勢が、岩宮教授からチームに伝播していることも日本の大学の相談センターで一番、カウンセリングに訪れる人が多い理由かもしれません。クライエントが自分の人生と和解し納得していくプロセスにオーダーメイドで寄り添い、ささやかな変化をお互いに確認し合う中で、研究は続いていきます。

もあります。一方で『大人』が家庭のなかにいないということは、子どもに対して親としての責任を負う人がいないということにもなり、それでさまざまな問題が起こることも」。その原因として考えられるのが社会の変化の激しさだといいます。「昔であれば、年長者のほうが若い人よりも経験もあり知識もあった。ところがデジタル時代になり、若い人のほうが新しいことを知っていて、年を重ねることでの安定感が社会の根底からなくなってしまった」と岩宮教授は話します。社会が目まぐるしく変化する時代

こころとそだちの相談センター

地域のさまざまな領域におけるこころのケアを、包括的にサポートしています。

＜お問合せ・ご相談のお申込み＞

TEL 0852-32-1100

月曜～金曜 10:00～16:00

ご本人か保護者の方が、電話でお申し込みください。